

2013年2月25日 公述人

「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画(原案)の概要」以前の問題として

本来ならば、原案への学術的見解を証左する場であることは認識しておりますが、それ以前の問題としての、一市民の私的疑義を述べさせていただきます。

つまり、「ダム建設ありき」にむかって、強引につじつま合わせし組み上げた積み木細工の、その集大成のような原案をこのまま承認してしまったら、あのハッ場ダム現地の脆い土壌では、先々、大変な災害を起こすことが目にみえていることに加え、日々溜まり行く、品木ダムの土素問題はどうかという大前提に留意して戴きたいのです。

その時、国は、県は、そして公務員などの関係者はどう責任がとれるのでしょうか？

一、国交省さんよ、公僕の良心はどこにいった!!

何よりも、詐術にみちた、到着点=ハッ場ダムありきへの原案を強引に推し進めてきた、国交省の体制に、小さな人間ながら怒りを覚えます。

まさしく原発と並ぶ、国策と言う名の国家の犯罪行為です。

今後も小手先の内部権力を行使し、性急にダム建設に邁進なされるのなら、公務員法違反として、処罰して貰いたいくらいの怒りに私たち市民は燃えています。

この2~3年間、国交省主催の利根川水系、並びにハッ場ダム関連の会議には、一縷の望みをもってほぼもれなくかけつけ見てまいりました。「検討の場」、「日本学術会議」「事業評価監視委員会」、まもなく打ち切られるであろう「利根川・江戸川有識者会議」など殆どかかすことなくつづさに。

そのどれもが、単に聴きおくだけで「ちゃんとやりましたよ」へのセレモニーでしかなく、真偽を極める「会議」という言葉からはほど遠いものでした。最後の承認機関でしかなく、「確かに会議をもちました。国民の皆さんにもちゃんとパブコメをお願いしているじゃありませんか」との悪く言えばアリバイ証明のための儀式でしかないわけです。本日のこの場も恐らくそうでしょうが、そうならないことを切望する次第です。

見聞し味わわさせられた各委員会の多くは、「意見を言わず、会議を長引かせないことが美德」式の水面下で根回した議員がハッバを利かし、議会は決議機関でしかなく裏工作で事が整った、地方議会と相似形だったのでした。

それを、国民の代表として選ばれた知識層が平然と行い、俗に言う御用学者の皆さんですが、進行役は公僕とよばれるエリート公務員さんたち。日頃、お世話になるお一人お一人はとっても親切な心配りの行きとどいた職員さんたちなのになです。如何に上からの命令とはいえ、集団となるとどうしてこんなことをなされるのかと切ないものが走ってなりません。失望感とともに怒りがわきました。

とりわけ腹がたったのは、名前の響きの良い「日本学術会議」と「事業評価監視委員会」。

この時心底、国の一連の組織のデキレースと言う言葉をかみしめました。単なる追認機関というより、もはやお追従機関にしか感じられませんでした。実際に審議過程と短時間にての決末を目の前にみて、こんなことに税金が使われ、国民の期待を裏切っているのかと思ったら、情けなくなりました。

で、2011年11月29日のその日、「国は、学者は責任とれるのか!」と孤軍奮闘、家田委員長にかみついた次第です。もちろん、ドンキホーテ並みの行動への羞恥心と無力感に打ちひしがれました。「知識人も公務員も良い国造りのためにあると信じてきたけれど、ああ、この国はこんな国だったのか」と。

そして、見えてくる帰結点が確かな輪郭をもって黒々と射程距離に入ってきました。

行きつく先が、この不思議な「利根川・江戸川河川整備計画」の原案に結実したとしか考えられません。

1952年の一片の通知から、61年目に突入した現在、看過しえませんが、ハッ場の心ある住民のお一人は、なぜやりに「いっか減かなことべえしているんさあ」といい切られます。

戦後68年たっても、未だ真相が暴かれ続ける戦争犯罪と同じく、きっとこんな拙速審議は、白日のもとにさらされるであろうことを信じ、その一点への祈りにも似た想いで、ここに立たせてもらっている次第です。

次に、身銭をきって真実に迫ってくださっている心ある研究者たちのたゆまぬ努力にて、最近浮かび出た三つの新

事実を具体例としてご紹介させて戴きます。いずれも他人様の貴重な資料です。でも、お許しくださると思います。そして、私の役目は現地の方々に、これらの最前線の情報お伝えする役柄と考え、この丸13年間、足しげくハッ場通いに明け暮れてきた歳月があります。

二、隠し持つ、全資料の速やかな開示を求め

新年早々、2013年1月6日の東京新聞一面に掲載された新事実です。見出しは「ハッ場ダム根拠 洪水量 過大値採用 建設に道 47～49年会議資料 少量推定 突然消える」。

岡本芳美(よしはる)・元新潟大教授(河川工学)が七三年、同省OBの技師・鷺尾整龍さんから寄託されたデータ一だそうです。※【添付資料① 関係配布資料① 東京新聞 2013/01/06 一面 / ②2013/01/10 「こちら特報部」】

1947年9月のカスリーン台風を受け、新たな治水対策をつくる会議「建設省治水調査会利根川委員会」の会議は、47年11月に始まり、ハッ場島における流量をめぐっては異論があり、第4回までは一万五千立方メートルだったのに、最大流量を決める49年2月の利根川委員会では、第六回に浮上した一万七千立方メートルのみが報告され、定着したという新事実でした。

「治水対策として上流部で造るダム群で三千立方メートルをカットし、残る一万四千立方メートルは下流の河道で流す方針となった」とし、「国交省は現在、一万七千立方メートルを基に同台風並みの雨が降った場合、最大流量は二万一千立方メートルと想定し、ハッ場ダム計画を進めている」とあります。

→2/14の「第8回利根川・江戸川有識者会議」の席で、野呂委員からの開示要求があり、去る21日の「第9回」の席で配布資料として配布され、インターネットにもあります。

さらに、文中の岡本芳美(よしはる)・元新潟大教授(河川工学)への、XXXXXXXXXXさんによる取材過程にて浮上した驚くべき新証言なのです!! ※【添付資料 ②】を参照

これまでは、カスリーン台風によって決壊したとの“固定観念”をもとに、過大な治水対策が採られてきたにもかかわらず、実際は埼玉県栗橋付近、やや上流の新川通が切れ、約300mの堤防は1mほど低かったというのです。

心ある研究者たちは、ちゃんと現場に立ちます。たゆまぬ努力をされてこられました。

事実は土地の者がもっとも良く知っているのに、現地調査をせず、机上の空論ででっちあげた事柄には、指摘後も、そのままなのは、他に次の事柄があります。

①群馬県玉村町を「玉度町」と記した地図

②高崎市内在り氾濫区域であったという事実と反するデータ類

インチャキデータはいずれの日にか、白日のもとにさらされ覆ることがあります。

砂上の楼閣的に都合のよい事実を積み重ね、「ダム案が最も適切」のごとき、造成案が大手をふるってきたわけです。

ともかく、いたずらな細工を止め、もてる資料の全開示を求める所以です。政治家がダメならば、せめて国交省の職員さんたちが、持てる優秀な頭脳にて、倉庫に眠る資料を検証してくださいませんか？

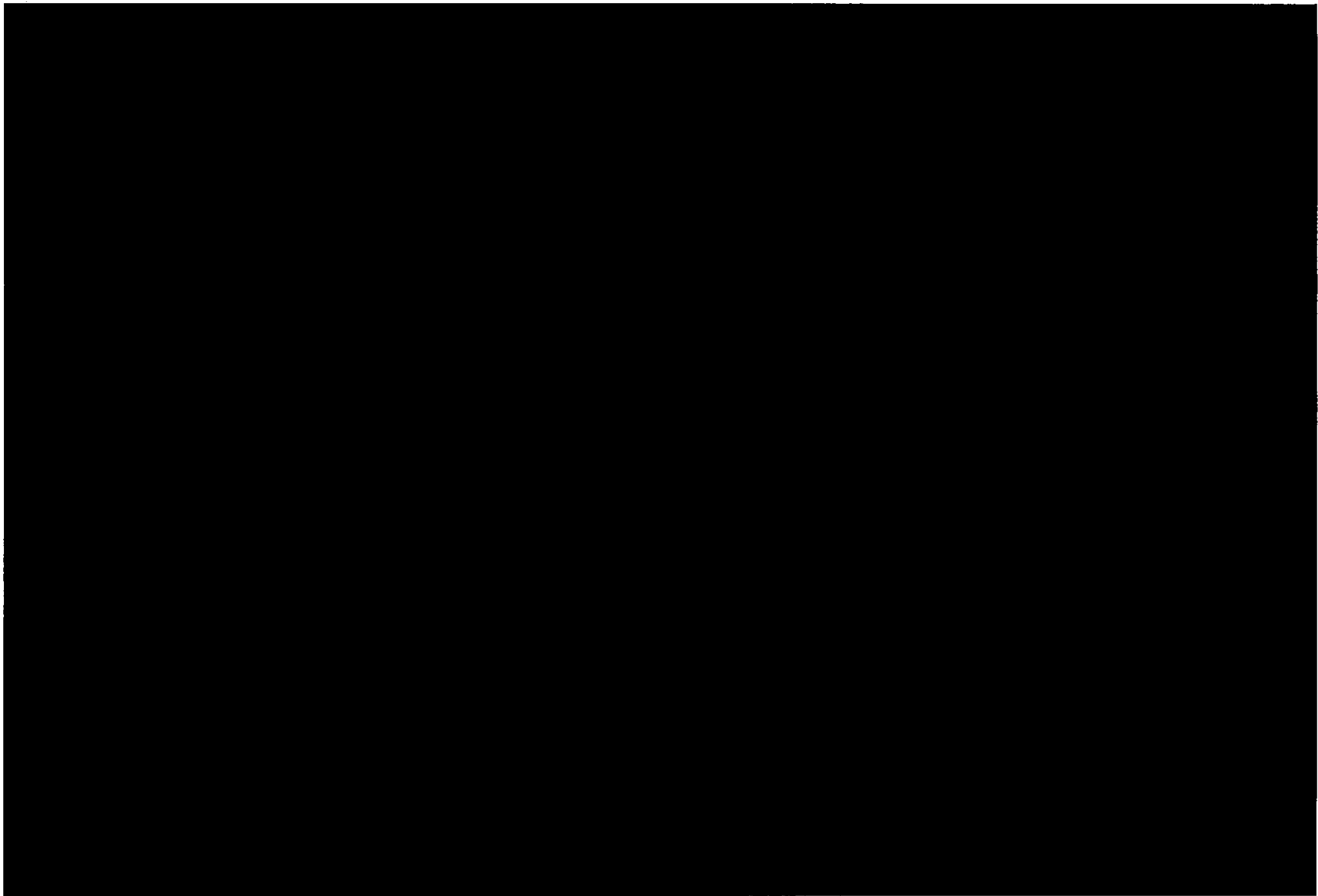
三、同じく、迫る焦眉の課題は、ハッ場現地の地質の問題とヒ素問題

地質学者のXXXXXXXXXXさんと、XXXXXXXXXXさんの研究によって、明るみにでた資料に、ハッ場の地質調査のデータがあります。最初の調査会社の報告書には危険な箇所がそのまま報告されていたそうですが、次の新たな業者報告には消えており、現在の「安全だ」の大合唱的報告書になった由。 ※【添付資料 ④】

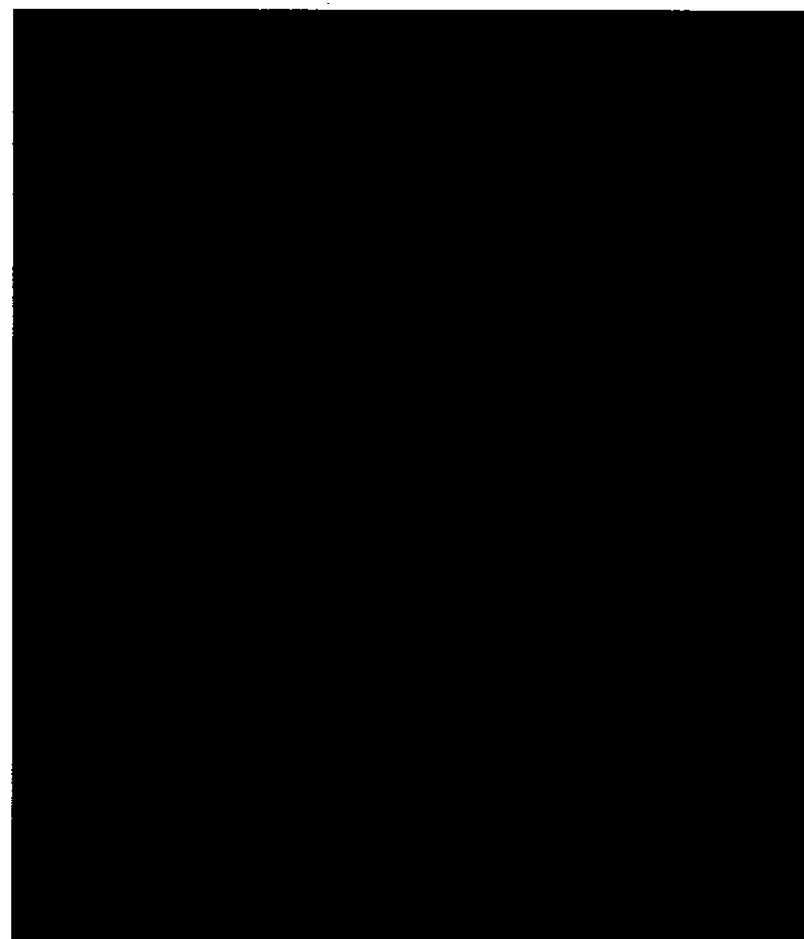
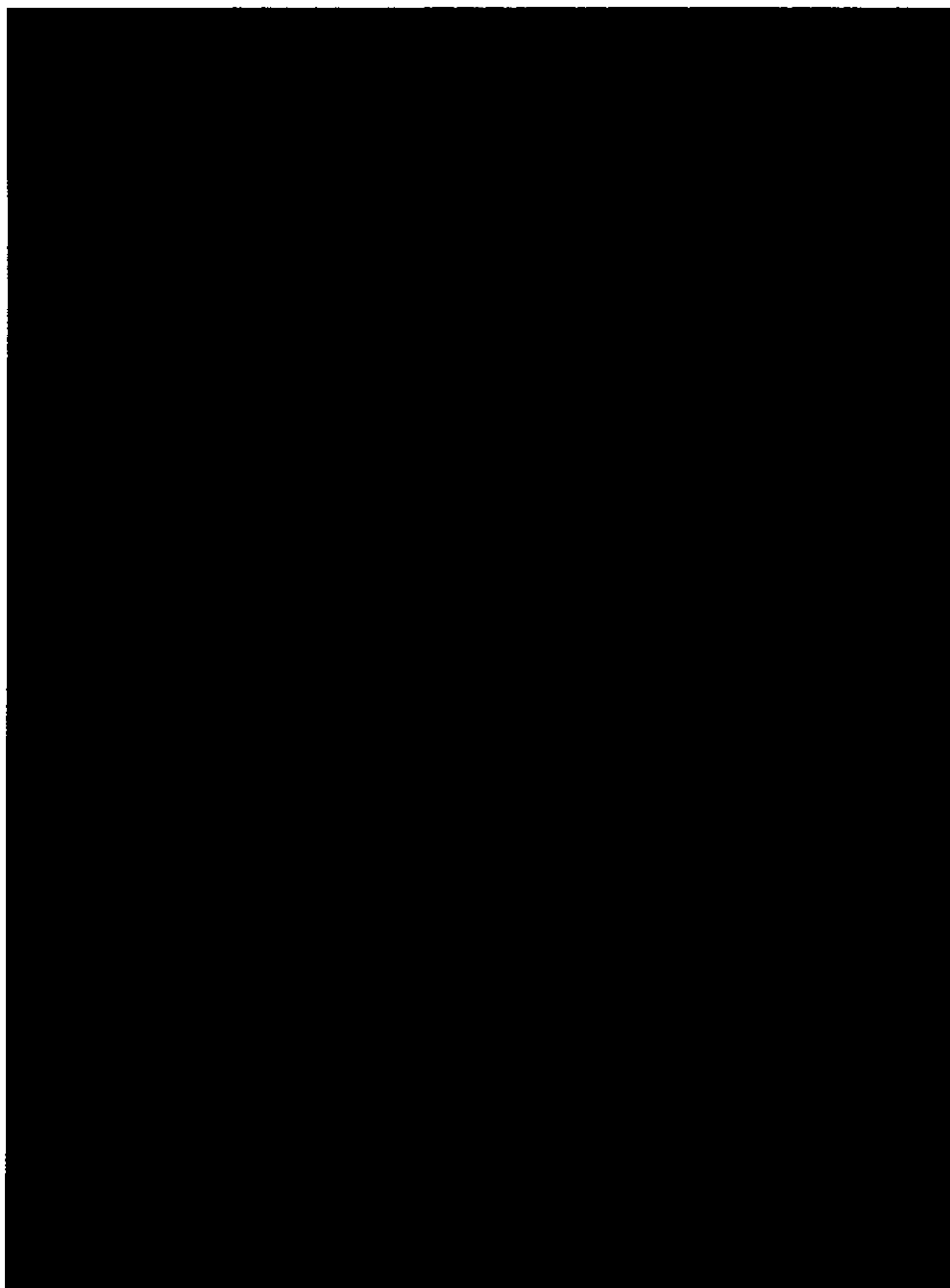
先日、群馬県高教組におけるXXXXXXXXXXさんのパワーポイントによる発表を見て、本当に空恐ろしくなりました。で、現地の水没地の方に伝えると、確かにハッ場ダム工事事務所は当初の説明会では正直にそう言っていたと、当方の取材に答えてくれています。 ※ヒ素問題は紙面と時間の関係上、割愛し、口頭にて。但し、大きな問題なり

身銭をきって、現地の山野を歩いて調査する研究者の姿勢はまっすぐ。嘘は言わないものです。データを改竄してまでも、仕事にありつこうとする営利的な会社のどっちが信じられるのでしょうか？

どうか、利益のために尻っぽをふって 旨みをすっている人たちの中で、さんざん踏みつけにされてきたにもかかわらず、物言わぬ言えない、現地の方たちが生きていられる間に、国民の命をまもる公僕(公僕)の勇氣あるメンツにかけて、真実に基づくご政道を切にお願い致します。 今般(今般)の原案の再検証を強く求めます。



- ④ [redacted] 資料 『ダムを造らない社会へ』(新泉社刊)所収
「ダム岩盤と代替地の安全性を問う 地盤崩壊の恐れ」～転載



※ [redacted]
さんの、「水源連」メール等へのメール文転載

- ③ [redacted] さんの、「水源連」メール等へのメール文転載